

小大連携による体力づくりを基礎とした豊かな心と 健やかな体を育成するための カリキュラムマネジメントの確立を目指して

Establishment of the Curriculum Management to Raise a Healthy Body and Spirit Based on Physical Training by the Cooperation of an Elementary School and the University

岡 田 良 平
Ryohei OKADA
(岬町立深日小学校)

保 田 智 子
Tomoko YASUDA
(大阪府岬町教育委員会)

河 村 愛 美
Manami KAWAMURA
(岬町立深日小学校)

長 根 わかば
Wakaba NAGANE
(岬町立深日小学校)

西 泰 亨
Yasuyuki NISHI
(岬町立深日小学校)

本 山 司
Tsukasa MOTOYAMA
(東亜大学)

本 山 貢
Mitsugi MOTOYAMA
(和歌山大学教育学部)

2017年7月26日受理

要旨

深日小学校は、平成28年度、大阪府より「子ども体力づくりサポート事業」として、児童の体力向上と教職員の指導技術の向上のため、岬町教育委員会および和歌山大学教育学部保健体育教室の指導・助言を得る機会を得た。1学期に行われた体力測定の講習を皮切りに、授業でのサポートやサーキットトレーニングの考案といった体力向上に向けた取り組みを行い、児童の体力測定の結果は2年間で大きく改善された。また、運動会での協力や小学生の大学見学などの連携を通して、小学校と大学がつながりを深めることができた。こうした小大連携を軸に学校の活性化、特色づくりを目指し、さまざまな取り組みを計画的に進めている。特に小大連携や平成29年度より大阪府の小学校で導入されたアクティブ・スクール実践校としての取り組みを通して、学校、家庭、地域、大学の連携が強くなり、小規模校として特徴的なカリキュラム・マネジメントの確立につながっている。

キーワード：カリキュラム・マネジメント、小大連携、学校づくり

1. はじめに

岬町立深日小学校(以下：深日小)は平成29年度、児童数96人の小規模校で、全学年が1クラスである。年々児童数が減少傾向にあり、1クラスの児童数も、1年生は11人、2年生は17人、3年生は6人と少ない。

表1は、平成22年度から平成29年度までの深日小の児童数の推移を示したものである。平成29年度は平成22年度比で約60%も児童数が減少している。このよう

に短期間で急激に児童数が減少し、さらなる児童数の減少が見込まれるなかで、これまでの深日小の学校のあり方や学校づくり自体を根本的に見直す必要性に迫られている。

平成28年度、深日小は大阪府教育庁による「子ども体力づくりサポート事業」の指定を受けることとなった。これは、全国の小学5年生を対象に実施されている体力測定の調査結果をもとに、体力の向上に指導・

表1. 深日小児童数の推移(平成22年度～29年度)

年 度	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
児童数	231人	213人	187人	177人	147人	120人	108人	96人

助言が必要と判断された学校に対して行われるもので、大阪府下では17市町の18の小学校(平成28年度)がサポート事業の対象となった¹⁾。この事業のねらいは、体力測定の結果から全国の結果と比較して子どもの体力に課題があるとされる大阪府が、児童に対して「小学校の教員だけでなくプロスポーツ団体の指導者や体育専門大学の教授、学生に学校に来てもらい、準備運動の方法から遊びの要素も取り入れて体力について学ぶ」こと、教職員は「それぞれの学校の授業を他校の先生にも参観してもらい、指導方法を学ぶ」ことにあるとしている²⁾。この事業の指導団体として、和歌山大学教育学部本山貢教授と同大学の保健体育教室が中心となり、岬町教育委員会と学校が連携して3・4年生を中心に体力向上に向けたプログラムを実践していくことになった。また、平成29年度から府内各自治体から1校以上、計120校を対象に、アクティブ・スクール実践校に指定され、岬町からは深日小が対象となった。

アクティブ・スクールとは、対象校に目的加配された教員を中心に、①学力の分析・検証・向上に向けた取り組みを推進・発信すること、②「学校活性化計画」を策定して、アンケート調査やテスト等の結果を分析し、前年度の参考値をもとに目標値を設定する。それに向けて進捗状況を確認しながら計画的かつ組織的に進めること、③小学校の教員が国語と算数を中心に、活用問題を先に考え、それに向けてどのような授業展開、授業改善をしていくのかを推進すること、の3点が求められている。このように深日小は、体力と学力の向上を両輪とした学校づくりという課題に正対したことで、あらためてカリキュラム・マネジメントの必要性に迫られることになった。

2. 学習指導要領の改訂に伴う対応

次期学習指導要領は、小学校は平成32年度、中学校は平成33年度が完全実施となる。改定の基本的な考え方として以下の3つが重要視されている。①教育基本法、学校教育法などをふまえ、子どもたちが将来を切り拓くための資質・能力を一層確実にするために、それらの能力は何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること、②現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成すること、③道徳教育の充実や体験活動の重視、保健・体育に関する指導の充実により豊かな心や健やかな体を育成することである。

①で求められる資質・能力とは、今後の変化の激しい社会で、「正解のない問題」に対し、今ある知識や情報を活用して問題を解決する力や修正可能な納得解や最適解を作る力が求められ、そのために主体的で対話的な学びの質や深まりを育んでいくことにある。そして教師には、授業改善と活性化、またその指標として

①児童が問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか、②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める対話的な学びの過程が実現できているか、③子ども自身が見通しを持って積極的に取り組むとともに、学習活動をふり返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうかを希求されている。

こうした改訂は小学校・体育科の目標および内容にも反映され、「体育の見方・考え方」として、「すること」だけでなく、「見ること」、「支えること」、「知ること」などを自分の適性等に応じて、多様な関わり方について考えることや、他者に伝える力を養うこと、仲間の考えや取り組みを認めたりすることの重要性が示されている³⁾。さらに、運動が苦手な児童や意欲的でない児童への配慮の例、ICT機器を活用して自己やグループの課題を見つける例など、例示を盛り込みながら示している。これらの体育科指導要領改訂の趣旨は、総説において示されているように、「カリキュラム・マネジメント及び主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する観点」をもとにして、「自身の学びや変容を自覚できる場面」、「グループなどで対話する場面」、「子どもが考える場面」、「教員が考える場面」の4場面の設定が指摘されている⁴⁾。そのため、今後の学校づくりには、学校全体として、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立が必要である。

3. 体力測定の結果を活かした体力向上に向けた実践

岬町教育委員会は、平成28年5月19日に多奈川小学校で町内3小学校の教職員を集めて、和歌山大学から体力測定の指導のポイントや注意事項についての講習を行った。その際の留意点をふまえて、各校でスポーツテストが実施された。これまで町内の3小学校では、全学年での実施、5年生だけが実施するパターンなど各学校の裁量に任されていたが、これを契機として、全小学校が全学年で実施することとなった。

こうした経緯を経て、深日小学校では、5月24日に全校児童が参加するスポーツテストが実施された。しかし、シャトルランなど一部種目に対して、低学年で実施することに対する慎重論もあり、すべての児童が全種目を経験するには至らなかった。平成29年度は全校児童が実施した。

図1、図2は、体力測定における3年間の5年生男女別の総合評価の変化を示している(Aが最も高く、Eが最も低いという評価である)。5年男子の場合、平成27年度では、A・B評価とも0%であったが、平成29年度にはA・B評価あわせて45%を超え、A・B・C評価合わせると80%以上の数値を示している。5年女子は平成27年、28年ともA評価の女子はおらず、B評価が大きく上昇する結果であったが、平成29年度では、

実に90%以上の女子児童がA・B評価を獲得したことになる。また、男女ともA・B評価の児童が増加しているだけでなく、D・E評価の児童が減少傾向にあることにも注目したい。これだけの劇的な変化は、体力測定の正しい計測方法が教職員に再確認されただけでなく、教職員や児童がスポーツテストへ取り組む意欲や意識の変化がみられたことである。

平成28年度	A	B	C	D	E
全国	11.7%	25.1%	33.5%	20.6%	9.1%
大阪	8.1%	22.3%	34.6%	23.9%	11.2%

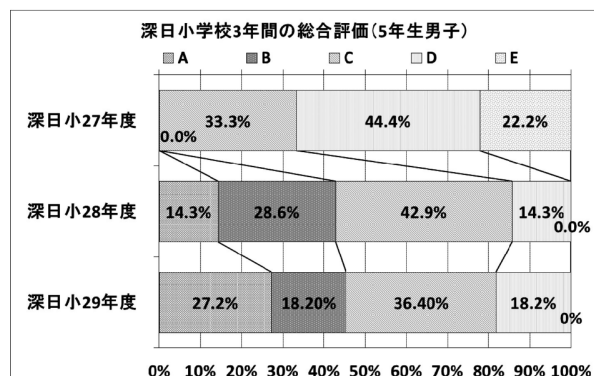


図1 深日小学校3年間の総合評価(5年生男子)
(参考に全国と大阪を上記に示す)

平成28年度	A	B	C	D	E
全国	15.4%	27.2%	33.7%	18.1%	5.6%
大阪	9.5%	23.2%	36.7%	23.3%	7.3%

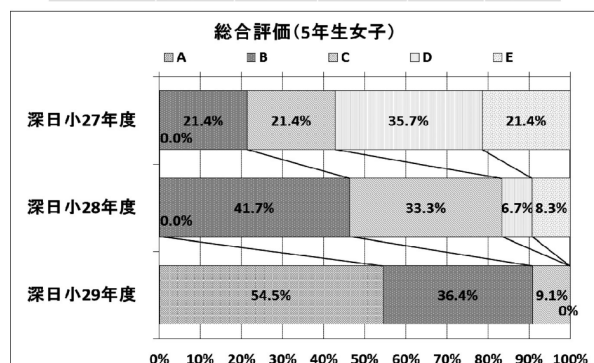


図2 深日小学校3年間の総合評価(5年生女子)
(参考に全国と大阪を上記に示す)

これまでの深日小は体力測定の該当学年である5年生だけが行ってきたが、全校児童が参加するようになってから、体育の授業時間を合わせて高学年と低学年で教えあいが行われるようになった。また、練習の際にも教職員が低学年の児童でもわかりやすいかけ声を見つけるなど、創意工夫と活気が生まれるようになった。また、和歌山大学の学生ボランティアが、毎週1回定期的にサポートに来てくれることで、シャトルランなど児童が苦手とする種目で積極的に参加するようになっていった。

近年では出版業者などが、体力測定の結果を児童にもわかりやすく示すことができるソフトを提供してい

ることもあり、児童ごとに目標値が明確になり、児童らが意欲の向上や結果を見直す機会にもなった。また、学校側も体力測定の結果から分析を行い、授業改善につなげるだけでなく、体育科の成績の評価の一部としても取り入れたり、参観日に保護者にも子どもたちと一緒に体験してもらうなど、教職員、児童、家庭、地域も含めた意識の変化を促していった。こうした2年間の取り組みが、大阪府のみならず、全国平均をも大きく上回る結果となった。

4. 大学を介在にした小規模校ならではの運動会づくりに向けた取り組み

体力測定での取り組みから体力の向上に向けて教員や児童の意識も徐々に変化し、学校全体で児童の体力づくりに向けて様々な取り組みが実施された。例えば、セレッソ大阪によるサッカーコーチの派遣事業やリオオリンピック7人制ラグビーの元ヘッドコーチの招聘など、児童が外部の人たちとつながり、体を動かすことに興味を持つきっかけづくりが動き始めた⁴⁾。そのなかで、和歌山大学教育学部の学生と運動会をともに作り上げていく試みがなされた。

10月に実施された運動会では、和歌山大学教育学部保健体育教室の学生が約20名参加した。この際、学生が単なるボランティアや運動会の手伝いとして位置づけるのではなく、保健体育専攻の学生として体育の素晴らしさを児童や地域の住民に伝えること、また、過疎化による児童数の減少が競技数や時間にも影響し、年々寂しくなっていく運動会をどのように盛り上げていくのかをテーマとした話し合いを行うなどの取り組みを行った。

大学側は運動会運営の担当者を2名付け、学校側の体育主任と連携して協議し、新種目や大学のデモンストレーションを企画した。新種目となった「借り人競争」では学生が児童や地域の人とともに参加し、世代間を越えた交流の種目を目指した。また、学生は2チームに分かれ、それぞれのチームの応援合戦や綱引きには率先して加わった。また、昼食の休憩時間には、学生が主体となってデモンストレーションを進行し、児童や地元の中学生、保護者などと一緒に50メートル走を競争する企画をした。特にこの企画は、陸上部などの運動部に所属する学生と真剣勝負するということもあり、学生の身体能力の高さを児童や地域の人たちが知る機会となった(写真1、2、3)。

児童も学生との交流を楽しむだけでなく、学生から正しい綱引きの体勢を教わったことで、劣勢だったチームが逆転勝ちを収める一幕もあった。学生にとっては部分的にはあるが運動会の計画や実施にかかわりつつ、児童と触れ合える貴重な機会となった。深日小学校にとっても、小学校と大学が連携することで地域と学校がより深い結びつきを持つ機会となった⁵⁾。



写真1 学生が応援団に参加し綱引きに声援を送る



写真2 学生主催の50メートル走



写真3 学生と地域の交流種目（借り人競争）

過疎地では、学校の運動会が地域のつながりを深める行事として住民に親しまれているが、少子高齢化によって従来どおりの運営が難しくなっている^{5,6)}。横山⁹⁾、佐野・松本ら¹⁰⁾は、運動会に大学生が参加したり、地域住民が積極的にかかわることで運動会が活性化し、地域と学校とのつながりが強くなったと報告している。今後、深日小では小規模校としての運動会のあり方を学校、大学、地域とともに検討していきたいと考えている。

11月から12月半ばにかけて、3・4年生を中心に、計7回の体づくりに関する授業づくりを保健体育教室が中心となって実施した。単元をマット運動として、そのためにバランス感覚、体幹、筋力を鍛えるメニューを取り入れたサーキットトレーニングを3・4年生の担任、体育主任、教育委員会、和歌山大学とで協議し、小学校の教員が継続して、毎時間の導入として行

えるものを考案した。また、大学側からバランスボールを貸与され、児童は道具を使って、楽しみながら体幹トレーニングを行い、ペア活動を通して相手の体の動きを知るということもできた。こうした活動は体育を専門としてこなかった教員にとって、知見を広げるだけでなく、児童も主体的に協働しながら活動する体育を経験する場となった(写真4、5)。

大学生が授業づくりの支援に学校に滞在する時間が増えたことで、学校側も児童の体力向上に向けて児童会が中心となって20分休憩の時間に全校児童で「バナナおに」を大学生と一緒にに行った。また、それに呼応する形で学生側が企画して、同じ時間帯に全校児童と「手つなぎおに」を実施した。こうした相互交流の機会が、徐々に広がり、昼休みにドッジボールをしたりする風景が次第に醸成されていった(写真6)。



写真4 サーキットトレーニング



写真5 バランスボールによる授業づくり



写真6 全校児童と学生の外遊び

5. 小大連携を生かした取り組みの発展

このように体力測定での連携を機に、小学校と大学の協力関係が深まっていった。そこで、小学校側からの提案で、キャリア教育の一貫として、教育委員会と和歌山大学の協力を得て、5年生(20人)が12月に大学見学を実施した。和歌山大学では例年、夏休み期間中にオープンキャンパスを開催しており、また近隣の小学校の校外学習の場としても受け入れている。しかし、岬町から児童が授業風景や実験の様子を見学することは初の試みであった。当日は、実際に授業をしている大学生の数学や国語、美術の講義、スポーツ実習、ゼミ活動、保健体育教室の心肺機能測定の実験現場、学部長室や体育館、図書館などの見学、昼食は500円のお小遣いで学食を自由に選んで食べる経験をした。昼食後、グループごとに分かれ、大学生数名が中心となって約1時間ほど学内を案内してくれるなど、より児童と学生が親密になれる機会が持たれた。こうした経験を児童たちがポスター発表という形にまとめ、校内に掲示したり、その後町役場のロビーに展示することになり、町民にも知ってもらえる機会となった(写真7、8)。

もともと岬町は大阪府の南端に位置し、経済的、文化的にも和歌山市内の影響が大きく、本校から車で20分程度の場所に位置している。しかし、児童にとって大学の雰囲気を経験できることは少なく、近いけれども遠い存在でしかなかった。この経験は児童らにとって非常に貴重な経験となり、保護者をも巻き込んだ学習意欲の向上という思わぬ形となって現れた。例えば、毎年12月に深日小で実施される地域と学校がつながる重要な行事である「深日まつり」がある。この中で、「子どもの主張」と題し、町長や多くの来賓、保護者がつめかけた体育館の壇上に上がり自分の夢などを発表する場があるが、「和歌山大学に行きたい」と題して発表する児童や「和歌山大学に進学してアナウンサーになる夢をかなえたい」という児童もいた。また、懇談では、食卓で大学進学の話で盛り上がり、実際に貯金を始める家庭もあった。児童らも自主学習や町が実施する実力テストに向けて進んで学習する児童が増えた。特に印象的だったのは、生活習慣が乱れがちだった児童が大学見学を機に、自分の夢を叶えるために明確に進学や進路を考えて、自ら率先して生活習慣を改善し、学習に取り組む姿勢や意欲までも変えたことである。児童らは自分なりの将来の夢や希望、なりたい職業などの夢を持っている。高学年になった児童がなぜ勉強がすることが必要で、それらがどのように将来いかされていくのかを具体的にわかりやすく経験できる場として大学や大学生が「あこがれ」として位置づけられたことは重要なことであり、キャリア教育につながった一例であった。

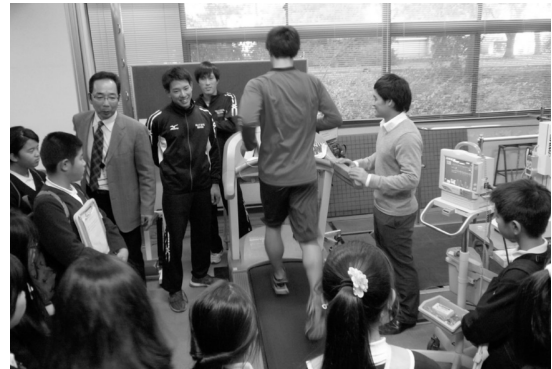


写真7 和歌山大学の授業見学

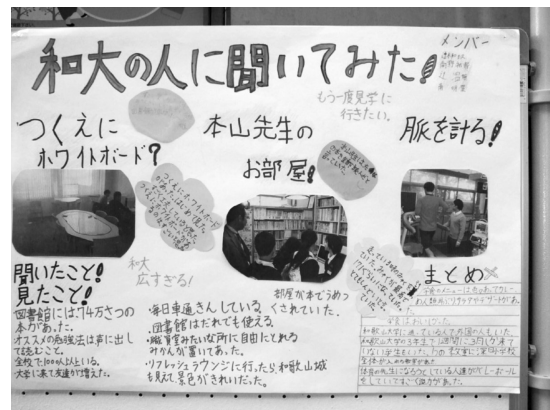


写真8 計6つのグループがポスターを作り、校内と役場のロビーに掲示した

6. カリキュラム・マネジメントの理念に基づく学校づくり

深日小の取り組みからみた小大連携の成果としては、以下の3点が挙げられる。①体力測定の結果、その実施に向けた研修も含め、教員の指導方法や測定についての知見を広げるだけでなく、測定そのものへの取り組む意識が高まり、子どもの意欲の向上へとつながった。②体力向上を目的とした授業計画が行われ、教員の体育の授業に対する意識の向上につながった。③大学生や地域とのかかわりが新しい形として生まれ、連携が深まったことである。特に、地域と学校、地域と子どもという二面的なつながりに、単にボランティアとして大学生がかかわるのではなく、計画性を持ち、組織的に大学生とかかわる形をつくったことで、学校、大学、地域の三者間で相互がWIN-WINの関係ができたことが非常に大きい。これは児童にキャリア教育の場として還元できただけでなく、その後、深日小学校の教員が、こうした成果をもとに大学の授業でゲストティーチャーとして招かれたり、他市の教職員研修に呼ばれて講演をすることにつながるなど、教員のキャリアアップとしても機能するようになった。これらは一貫して学校側の管理職と教員が進むべき方向性を共有した上で、学校、大学、学生、教育委員会の担当者が緊密に連絡を取り合い、その都度、次の展開に

に向けた計画を考案し、協議しながら実施していったことが大きな要因であったと考える。また最も重要な要因と考えられたことは、当然のことではあるが協議の中心は教育委員会であり、各方面への調整や積極的な働きかけがなされて体制強化となり、円滑な意思疎通のための重要な役割を果たしていたことである。

文部科学省は学習指導要領の実現するために必要な方策として、カリキュラム・マネジメントの重要性を強調している。カリキュラム・マネジメントとは、学校の教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程(カリキュラム)を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、そのための条件づくり・整備である。またそれは、学校経営の営みにおいて中核に位置付くものであると指摘している。深日小学校においてもカリキュラム・マネジメントの確立に向け特徴のある学校経営を計画し実施している(図3)。具体的には、カリキュラムのPDCAサイクルの実践として、各学期ごとに「学習評価の充実」、「学習指導の充実」、「家庭学習」、「学習規律」、「校種間連携」、「府教育センターとの連携」の6観点において、取り組み内容や指標、前年度の参考値、今年度の目標値を設定し、各月ごとの進捗状況を確認できるようにしている。また最近では、学校づくりの特徴的な取り組みとして、小学校と大学が協力し連携関係をより深めていくことでカリキュラム・マネジメントを強化につながっている。今後、こうした取り組みを継続的に実施し、分析や検証を三者間の組織的に行うことで学校経営を益々進化させていきたいと考えている。

二宮・川前ら⁷⁾は地方の過疎地や僻地では三者間のつながりが都市部に比べ重要性が高くなると指摘している。深日小学校のように、少子高齢化に歯止めがかからず、過疎地や僻地と同様な状況にあるなかで三者間のつながりを重視した学校づくりを模索していく必要がある。また、大宮・増田⁸⁾、松本・上野⁹⁾らは、地

方の大学の魅力の創出と地域への還元という観点からも、小学校を教員と大学が共同研究する場、地域に根ざした教育ができる場、地域に還元、発信する場として位置づけることが重要であると指摘している⁷⁾。教員養成の担う和歌山大学教育学部にとっても教育研究の実践の場として連携していくメリットは大きいと考える。

まとめ

深日小学校は、学校づくりを積極的に行う上で、学校や児童が少しずつ変革していく様子を運動会や子どもの主張、大学見学などを通して確認できた。また地域や保護者が学校教育の現状を直接知る機会を得たことが後押しとなって、三者間の信頼関係をより深めることにつながった。

最後に深日小学校にとって学校、家庭、大学、地域の連携強化は、学校管理運営において大変重要な役割を担っていくことが今回の取り組み全体を通してわかった。今後、教育現場に求められる「カリキュラム・マネジメント」の確立に向け、小規模校の特徴を生かしながら、さらに発展的で新たなプラン作成に取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

本稿の執筆にあたって、元岬町教育委員会教育次長廣田節子氏、同委員会課長澤憲一氏には関係各所への調整等を含め、小学校と大学の連携事業全般において大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) おおさか子ども元気アップ新聞, 毎日新聞社, 平成28年7月第15号, p15.
- 2) 小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省(平成29年6月), p19.
- 3) 小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省(平成29年6月), p8.
- 4) 岬町広報: 岬だより, 平成29年1月1日発行, p6.
- 5) 横山剛士: 「教育イノベーションの継続的採用を促す組織的要因の検討: 学校と地域の連携による合同運動会の定着過程に関する事例研究」, 『日本教育経営学会紀要』(47), 145-160, 2005.
- 6) 佐野昌行, 松本光弘: 「地域運動会への大学生の参加が学生・大学・地域にもたらす効果」『学校法人タイケン学園グループ研究誌』(4), 8-12, 2013.
- 7) 二宮信一, 川前あゆみ: 『教育活動に活かそう へき地小規模校の理念と実践』, 教育新聞社, 2013.
- 8) 大宮登, 増田正: 『大学と連携した地域再生戦略～地域が大学を育て、大学が地域を育てる～』, ぎょうせい, 2007年.
- 9) 松本泰道, 上野眞也: 『地域を育てる大学の挑戦』, 成文堂, 2016年.

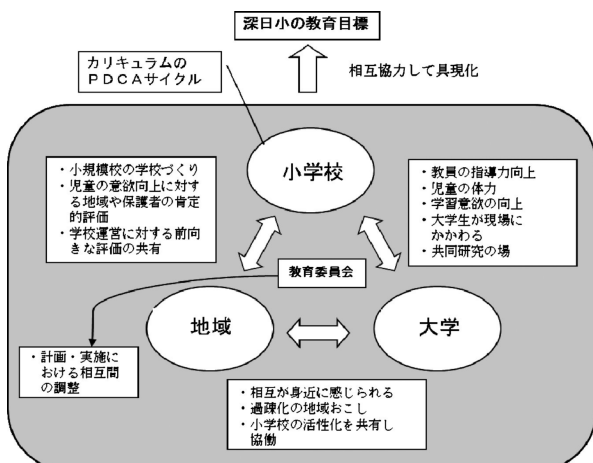


図3 深日小学校のカリキュラム・マネジメント図